

島根県立
古代出雲歴史博物館
NEWS

2009.APR vol. 9



CONTENTS

- 2・3 特別展「神々の座 出雲」特集
- 4・5 特別展「どすこい! 出雲と相撲」特集
- 6・7 学芸員通信/古代文化センターだより/山陰歴史回廊/出雲への道・出雲からの道
- 8 企画展スケジュール2009/お知らせ



並河萬里 写真展

神々の座 出雲

特別展 2009年 5月29日(金)→7月5日(日)

特別展「神々の座 出雲」

出雲の虜になった理由

—世界のNAMIKAWAワールド—

冒険写真家と異名をとり半世紀の間、世界中を歩き続けてきた並河万里が1990年からおおむね9年間島根の地で暮らし記録に遺しました。時にヘリコプターから身を乗り出し、また釣果のすそ分けをしてくれる漁師の漁船の上から、酒を酌み交わし、神楽を夜通し舞い続ける島根の人々と共に風土・自然や文化財、民俗芸能などを撮影し「神々の座 出雲」を完成させました。

この「神々の座 出雲」写真展では、1955年、24歳の時に撮影した国譲りの舞台である「稲佐の浜」、1997年に撮影した12年に一度の船神事「ホーランエンヤ」があり、「神々の座 出雲」を完成させるに約40年の歳月を要しました。シルクロードの熱風と砂嵐にまみれる中であっても、カンボジアでは地雷、空爆の爆音のもとでも、刃の切っ先を向けられ生命の危機を感じたときであっても島根への情念を持ち続けていたということです。写真家並河万里にとって島根は極めて重要な地であり、写真家としての信念を貫くテーマであったといえます。

人はいつまでも生き続けることを深く望み、目に見えぬ神に強く祈ります。島根の神様はオオクニヌシを代表として穏やかで争いを厭う優しい神様です。そんな神のもとで島根人は壮大で険しい自然に逆らわず、屈することなく自然のままに生き伝統と感性を育み、神と対話することにより人間らしく美しく生きていきます。この姿に並河万里は魂をゆさぶられました。古代出雲の謎を秘めて横たわる山並み、不思議な懐かしさを感じさせる雲、宍道湖に映える夕日の美しさ、目に見えぬ縁を永遠に結ぶために神が集う神在月。このたおやかな風景のなかでともに暮らし、島根人の静かに熱く自信あふれる表情をとらえ、生命力を感じるフィルムを遺しました。

この写真展の開催を見ることなく2006年、74歳で並河万里は亡くなりましたが、古代から続く神々との旅—出雲びとの命の讃歌をここに紹介します。人と文化との調和に目を向けシャッターを切りつづけた、並河万里からのメッセージです。

会期 平成21年 **5月29日(金)→7月5日(日)** (開館時間：9時～18時)
(休館日：6月16日(火))

会場 島根県立古代出雲歴史博物館 特別展示室

■主催：島根県文化振興財団・島根県立古代出雲歴史博物館
■後援：松江市・朝日新聞社松江総局・毎日新聞社松江支局・読売新聞社松江支局・産経新聞社松江支局・中国新聞社山陰中央新報社・新日本海新聞社・島根日日新聞社・共同通信社松江支局・時事通信社松江支局
NHK松江放送局・BSS山陰放送・日本海テレビ・山陰中央テレビ・エフエム山陰・山陰ケーブルビジョン株式会社
出雲ケーブルビジョン株式会社・ひらたCATV株式会社



「権現祭 鷺浦」1991年撮影



「仮面」1992年撮影



「原田神楽」1992年撮影

島根の神楽は今でも人々のなかにある。だれからも強制されず、自然と神と遊べる雰囲気がこれほど残っているところがあるだろうか。遠い昔から続く、神との触れ合い。それが島根の神楽にある。(並河万里)



「一本釣の漁船」1992年撮影

ここぞと場所を定めると漁師たちはエンジンを止め、パッと一瞬の魔法のように帆を開く。鷺浦の漁師たちは黙々と海に乗り出し、陸に上がれば、何をおいてもまず神社に詣でる。(並河万里)

並河万里写真展へのご招待

並河万里写真展
「神々の座 出雲」 **関連イベント**

①ギャラリートーク

5月29日(金) 午後2時から：担当者
5月30日(土) 午後2時から：担当者

②「デジタルカメラビギナーズ講座」

デジタルカメラビギナーズ集まれ！
ドラマチックな写真を撮ってみませんか。
6月6日(土) 午後2時から
講師：原隆利（日本写真作家協会会員）
定員：30人
対象：デジタルカメラ初心者対象です。お手持ちのデジタルカメラを持参ください。撮影会も行います。
会場：島根県立古代出雲歴史博物館 講義室

③「デジタルアートの世界Ⅰ」

デジタルカメラで撮影した写真を加工する楽しみ方を紹介します。
6月13日(土) 午後1時から
講師：高野孝治（島根県写真家連盟会員）ほか
定員：20人
対象：高校生が対象です。お手持ちのデジタルカメラを持参ください。
会場：島根県立古代出雲歴史博物館 講義室

④「デジタルアートの世界Ⅱ」

デジタルカメラで撮影した写真を加工する楽しみ方を紹介します。
6月20日(土) 午後1時から
講師：足立修吉（島根県写真家連盟会員）ほか
定員：20人
対象：写真のデジタル加工に興味のある方が対象です。お手持ちのデジタルカメラを持参ください。
会場：島根県立古代出雲歴史博物館 講義室

②・③・④の各種イベントに参加を希望される方は、下記のいずれかの方法でお申し込み下さい。

● 申込方法 ●

- ①希望イベント名 ②住所 ③氏名
- ④電話番号をご記入の上
- (ア) ファックス：0852-36-5390
- (イ) 電子メール
simaphoto@sx.miracle.ne.jp
- (ウ) 電話：0852-36-5390
並河万里写真展イベント参加係あて

島根県は、国譲り神話や野見宿禰の伝承などから相撲の起源の地とされています。また、相撲史上、出雲抜きに語れないのは江戸時代です。松江藩は雷電為右衛門など多くの力士を抱え、これらの力士は雲州力士として江戸などの勤進相撲で活躍しています。このように相撲に縁の深い島根の地から、雲州力士の活躍の様子を中心に、相撲の歴史に迫ります。

なぜなに? 1 なぜ相撲の起源が島根?

相撲の起源として二つの神話・伝承が伝わっています。一つは『古事記』のいわゆる国譲り神話です。タケミカヅチに国譲りの可否を問われたオオクニヌシは2人の息子に意見を聞きます。コトシロヌシはこれを承諾しますが、タケミナカタは稲佐浜で力較べに及びます。二つめは『日本書紀』の垂仁天皇7年7月7日の記述です。大和に當麻蹶速という強力者がいて、自分よりも強い者はいないと誇っていました。天皇はこれを聞き、これに力が並ぶ者がいないかと聞いたところ、出雲国に野見宿禰という者がいるといいます。そこで野見宿禰を呼び出して、蹶速と力較べをさせたとあります。この二つの力較べが相撲の起源とされているのです。どちらも出雲に関係していることから、一般に、島根は相撲起源の地とされているのです。とりわけ後者の話は、10世紀までに成立した史書『類聚国史』の「相撲」の項の冒頭に記されており、この頃すでに、この話が相撲の起源を語るものと考えられていたことがわかります。



野見宿禰と當麻蹶速対戦之図(河鍋暁斎・勸日本相撲協会相撲博物館蔵)

ちなみに、佐太神社の社家の一つであった木村家は行司発祥の家ともいわれています。行司の発祥も出雲に関係しているのかもしれませんが。

なぜなに? 2 出雲大社と相撲との関係は?

出雲国造家は、アメノホヒの子孫として連綿と今につながっているとされますが、相撲の起源で登場した野見宿禰は、このアメノホヒの14世孫とされています。出雲国造家と野見宿禰は同じ血脈なのです。そして、出雲大社ではかつて、三月会や遷宮の時に相撲が奉納されていました。また現在でも、国造の代替わりの時におこなわれる火継ぎ神事において、相撲が行われています。このように見ると、出雲大社と相撲も縁が深いことがわかります。

ちなみに、幕内通算成績254勝10敗2分14預という強豪力士、雷電為右衛門をはじめとする松江藩お抱え力士は、寛政7年(1795)や享和元年(1801)に、出雲大社や両国造家において、相撲や土俵入りを行っています。



化粧まわし姿一人立 濃錦里(不知火)諾右衛門(国貞)

なぜなに? 3 雷電、小野川を「投げる」、でも勝負は預かり?



化粧まわし姿一人立 雷電(春英・勸日本相撲協会相撲博物館蔵)

寛政2年(1790)、雷電は横綱小野川と対戦します。雷電(もしくはその関係者)が残した日記『諸国相撲和(控)帳(いわゆる『雷電日記』)』には、「小野川もなげ候」と記されています。しかしながら、勝敗表には勝負「預かり」となっています。当時、力士は、雷電は松江藩というように、どこかの藩に抱えられており、それ故、藩のメンツがかかった勝負でした。この勝負が「預かり」とされたのは、小野川を抱える久留米藩に気がつかなかったのではないかと、いわれています。

なぜなに? 4 力士は藩の広告塔?

力士は藩の力を顕示する役割、いわば広告塔ともいえる存在でした。それ故、力士はどの藩に属するのか、それが一目でわかるような化粧まわしをしていました。松江藩お抱え力士の場合は、「山形に子持二引き」文様、文化年間以後は、松平不昧公に縁のある「瓢箪つなぎ」文様をしていました。また、寛政3年(1791)の将軍上覧相撲の時には、白緞子に白房という純白の地に、黒で「雲」の字を刺繍した化粧まわしを使ったといわれています。これはかなり目立ったものと思われます。

松江開府
400年

特別展

どすこい! 出雲と相撲

平成21年
7月17日(金)~9月23日(水)

なぜなに? 5 雷電 vs 雷電?

雷電為右衛門が相撲を取っていた時、雷電灘之助という同じ「雷電」を四股名とする力士がいました。寛政2年(1790)11月をはじめとして3度、この雷電VS雷電という取組が行われました。呼出しは一体どんな風に行われていたのでしょうか。



大相撲部屋之図(国貞)

なぜなに? 6 松江藩お抱え力士がいないと?

享和元年(1801)3月の番付を見ると、西方の上位六人は雲州力士で占められています。大関 雷電為右衛門、関脇 千田川吉五郎(後の大関 玉垣額之助)、小結 鳴滝文太夫(現雲南市木次町出身)、前頭筆頭 稲妻 咲右衛門(元大関、現安来市出身、釈迦ヶ嶽雲右衛門の弟)、棧シ初五郎(最高位 前頭筆頭、後に佐渡ヶ嶽沢右衛門)、秀ノ山伝治郎(最高位 小結)です。これらの力士が、藩の出場許可が取れず相撲興行に出なかったとすれば、興行は大変なことになったものと思われます。実際、享和元年11月、お抱え力士たちは不昧公の帰国にあわせて松江に滞在しており、本場所には出場しませんでした。この時、年寄 東関庄助が、お抱え力士の出場をわざわざ江戸から頼みにきたことが、『雷電日記』に書かれています。興行には是非とも松江藩お抱え力士が必要であったことが推測できます。



化粧まわし姿一人立 鳴滝文太夫(春英・勸日本相撲協会相撲博物館蔵)

なぜなに? 7 横綱の代数を決めたのは誰?

よく第〇代横綱〇〇といわれますが、この代数を決めたのは、実は現東出雲町出身の陣幕久五郎なのです。東京深川(富岡)八幡宮に現在も陣幕が建てた横綱記念碑が残っていますが、実は、陣幕がこれを建てる時に、初代を明石志賀之助とする横綱の代数を決定したのです。その時、陣幕は自分を第12代横綱に位置付けています。

ちなみに、陣幕は島根県出身の唯一の横綱です。しかしながら、お抱え力士としては、第7代の稲妻 雷五郎、お抱え力士出身としては、第8代不知火諾右衛門、第9代秀ノ山雷五郎がいます。

なぜなに? 8 江戸時代のプロマイド?

力士の姿は錦絵に数多く残されています。錦絵とは、現在のプロマイドのようなもので、実際、人気力士や人気の取組の錦絵が多く作られています。どすこい展では会期中100枚を超える錦絵で松江藩お抱え力士や、ライバル藩(の化粧まわしをした)力士などを紹介します。錦絵の作者は勝川春英、春亭、歌川豊国、そして皆さんご存じの喜多川歌麿、写楽の作品もあります。また錦絵の他にも、菱川師宣や池大雅、川村文鳳などの作品も展示されます。相撲の歴史だけでなく、江戸時代の美術を楽しむこともできる特別展です。



横綱一人立 秀ノ山雷五郎(三代豊国)



釈迦ヶ嶽雲右衛門と女(磯田湖龍齋・勸日本相撲協会相撲博物館蔵)

建築ウォッチングツアーを開催しました。

学芸グループ課長 的野克之

歴博の展示室には、小さな勾玉から高さ4.8mもある平安時代の出雲大社の模型までいろいろなものがあります。しかし、どんなにがんばっても展示できないものが、本物の建築です。テーマ別展示室で出雲大社を取り上げている歴博としては、お客様に出雲大社の建築をじっくり見ていただく機会を窺っていましたが、このほど「NPO法人古代出雲歴博ボランティアの会」の主催で「出雲大社と周辺の国宝・重文建築を一気に見る！」と題した建築のウォッチングツアーが実施されました。

歴博の周辺には、出雲大社や旧大社駅本屋など、国宝・重文の建築が23棟も集中しています。展示会でもこれだけの数の国宝・重文を一堂に展示することはめったにありません。ツアー当日は38人の参加者が集まり、建築に詳しい米子高専の和田嘉宥教授の案内でじっくり見て歩きました。普段のツアーですとバスなどに乗って移動するところですが、今回は歴博周辺ですので、すべて歩いて廻りました。昼食には地元旅館で大社の伝統食「うずに膳」を、そしておやつには旧大社駅で「ぜんざい」をいただき、食の面でも楽しんでいただきました。

お客様には、普段の展示会とはまた違った文化財の見方を堪能していただけたと思います。これを機会に今後も積極的に「展示室」を飛び出してゆこうと思っています。

※このツアーは国土交通省の「ニューツーリズム創出・流通促進事業」として実施されました。



基礎研究

「地道な発掘調査の話」

古代文化センター 主任研究員 増田 浩太

どんな調査研究でもそうですが、基礎となるデータが揃っていないと高度な研究は進みません。「この古墳は四世紀末に造られた全長57mの前方後円墳で…」というような簡単な説明でさえ、古墳の正確な大きさや形、築造時期などが分からなければできません。より高度な研究をするためには、どうしても必要な基礎データといえます。ところが、こうした古墳のデータは、詳細な測量や発掘調査をして初めて判明する場合もあり、比較的大きな古墳であっても案外分かっていないことが多いのです。

解決法はただ一つ、一つずつ古墳を測量し、必要があれば発掘をするしかありません。発掘といっても、石室を掘りあげて立派な副葬品を探すわけではありません。古墳の周囲に幅1m、長さ数mほどの発掘区をいくつか設けて、古墳の範囲や墳丘の構造を調べる地味なものです。ニュースに取り上げられる派手な発見もありませんが、基礎データを得るためには避けて通れないのです。

古代文化センターでは、埋蔵文化財調査センターと共同で、平成9年からプロジェクトを立ち上げ、これまでに10基の古墳を測量・発掘してきました。その中には出雲地域で最初に造られた前方後円墳である廻田1号墳



(松江市)や大寺1号墳(出雲市)、県下最大の前方後円墳の可能性あるスクモ塚古墳(益田市)などが含まれますが、いずれも各地域の古墳時代を研究する上で欠くことのできない古墳ばかりです。今年度からは、松江市西尾町に位置する廟所古墳(県下最大の方墳とされているが、築造時期や正確な大きさは不明)の調査を始めています。この冬は寒さが厳しく、雪の積もった古墳での調査は発掘担当者にとっても辛いものでしたが、そんな地道な努力がいつかきっと古墳の研究に役立つ時が来ると信じて頑張っています。

第2回

石見銀山世界遺産センター



世界遺産センター外観

昨年10月20日、石見銀山の玄関口となる「石見銀山世界遺産センター」がフルオープンしました。世界遺産に登録された遺跡の価値や魅力を分かりやすく紹介するとともに、遺跡の調査研究や保存管理も担う、「世界遺産 石見銀山遺跡」の拠点となる施設です。

フルオープンから今年の2月末までに約5万人、また一昨年10月にガイダンス棟が先行オープンしてからは実に29万人近くの方が訪れています。隣接地には約400台分の駐車場を備え、訪れた方が路線バスに乗り換えで大森の町並み保存地区に向かう「パーク&ライド」の拠点にもなっています。

フルオープンによって、新たに「展示棟」と「収蔵体験棟」が加わりました。特に、施設のメインとなる「展示棟」では、世界に影響を与えた石見銀山の歴史や鉱山技術を模型や映像などを通して紹介しており、世界遺産としての価値を体感していただけます。



吹屋(製錬所)を再現した建物

展示室には、17世紀初めの「吹屋」(製錬所)を当時の原寸大で再現しています。その建物内に配置した人形とオリジナル映像により、銀の生産量を飛躍的に高めた「灰吹法」を詳しく解説しており、鉱石から銀を取り出すまでの製錬の工程がよく分かります。

また、銀山最大級の坑道「大久保間歩」の坑内を再現した模型により、江戸時代と明治時代との採掘跡の違いがじっくり観察できるようになっています。壁面の質感は本物と見間違えるほどで、坑内の映像と併せてご覧いただくと、本当に間歩の中に入ったかのような感覚が味わえます。



大久保間歩坑内の再現模型

この他にも、銀山最盛期の鉱山町を再現した模型や、毛利元就が朝廷に献納した「御取納丁銀」の拡大模型、CGを駆使した各種映像など様々な展示によって遺跡の全容を深く理解していただけるようになっており、遺跡や町並み等の現地を訪れる前の事前学習に最適です。石見銀山へお越しの際には、ぜひお立ち寄りください！

- ▷開館時間/8:30~18:00 (12月~2月は8:30~17:30)
- ▷休館日/毎月最終の火曜日・年末年始
- ▷展示室観覧時間/9:00~17:00 (入場は16:30まで)
- ▷展示室観覧料金/大人:300円 小中生:150円
- 【団体】大人:250円 小中生:100円

お問い合わせ

石見銀山世界遺産センター
〒694-0305 大田市大森町イ1597-3
TEL 0854-89-0183 FAX 0854-89-0089
<http://iwamigin.jp/ohda/minasdeplata/ginzan/>

テーマ研究

「古代出雲の多面的交流の研究」

前回は、『播磨国風土記』に見える出雲人の話をしましたが、この風土記には実は出雲から来た神々の伝承も残されています。たとえば、播磨国揖保郡上岡里(の)のできごと。

出雲国に阿菩大神という神様がいました。この神は、大倭国で畝傍山・香具山・耳成山の三山が争っていると聞いて、それを仲裁するために出雲国から大倭国へ向かったのですが、上岡里までやって来たところで闘いが終わったことを聞き、乗ってきた船を覆して鎮まったというのです。

次に、播磨国揖保郡神尾山(の)のできごと。そこに山出雲国からやって来た御蔭大神(の)がいました。この神は山の麓を歩き来たる人々を苦しめたので、伯耆の人小保豆・因幡の布久漏・出雲の都伎也の三人が朝廷に訴え出ました。そこで、朝廷は額田部連久々等を播磨国に派遣して祭りをを行いこれを鎮めたと言います。

しかし、御蔭大神の祟りはまだ続いたようで、出雲国の人で山の麓を通り過ぎる者のうちで10人のうち、5人を引き留め、そのうち3人を殺したと言いますから、播磨国の人にとって畏怖すべき存在だったのでしょうか。では、古代の播磨国で行われていた出雲系の神々の祭りの実態はどうだったのでしょうか。また、出雲の神を祭るのに、伯耆国や因幡国の人々が関与しているのは何故か?その謎を解明するため、これから鳥取県の智頭街道を抜けて兵庫県たつの市へ行ってきました。

(古代文化センター専門研究員 森田喜久男)

